

塩治地区遺跡分布調査II

1987年3月
出雲市教育委員会

塩治地区遺跡分布調査II

1987年3月

出雲市教育委員会

は じ め に

出雲市塩治地区は、市内で最も埋蔵文化財の密集する地域ですが、反面、最も開発が進行しつつある地域でもあります。

こうしたことから、昭和60年、61年度に国庫補助事業として塩治地区遺跡分布調査を実施し、遺跡の分布と範囲の確認に努めてまいりました。

今年度は、上塩治町をのぞく塩治地区を対象として、遺跡分布調査を行なったほか、開発による危機に最も直面している天神遺跡の範囲確認のための発掘調査を実施し、遺跡の実態をさらに詳しく知ることができました。

こうした成果をふまえたうえで、今後の出雲市の文化財保護行政をさらに進展させていく所存です。

厳しい自然条件のもと、調査にご指導ご協力を賜わりました関係各位に厚くお礼申し上げます。

昭和62年3月

出雲市教育委員会

教育長 石 飛 満

例　　言

1. 本書は、出雲市教育委員会が、昭和61年度に国庫補助事業として実施した塩治地区遺跡分布調査の報告書である。
2. 調査は、遺跡分布調査のほか、天神遺跡の範囲確認のための発掘調査を行なった。
3. 発掘調査は、昭和61年12月2日から12月27日まで実施し、遺跡分布調査は昭和62年1月に行なった。
4. 調査体制は次のとおりである。

調査指導者　田中義昭（島根大学法文学部教授）、勝部昭（安来市立第一中学校教諭）、
宮沢明久（島根県教育庁文化課文化財保護主事）

調査員　　川上稔（出雲市教育委員会社会教育課主事）

調査補助員　妹尾修嗣（島根大学学生）

事務局　　今岡清（出雲市教育委員会社会教育課長）、須谷忠（同文化係長）

5. 調査にあたっては、土地所有者をはじめ、地元の方々から多大の協力をいただいた。
6. 本書の執筆、編集は、調査員の手によるが、遺物の整理等には、妹尾修嗣、柳楽敬子、山本信子の各氏の協力を得た。また、県立博物館の村上勇氏をはじめ、県教委文化課分室の方々には、出土遺物についてご教示を賜わった。
7. 表紙のカラー写真は、塩治クラブの御好意により、掲載したものである。
8. 本遺跡の出土遺物は、出雲市教育委員会で保管している。

目　　次

1. 位置と環境	1
2. 調査の概要	5
3. 天神遺跡範囲確認発掘調査	6
4. 遺跡分布調査	25
①遺跡一覧表	
②遺跡地図	

1. 位置と環境

出雲市塩治地区は、神戸川が南の丘陵から平野に注ぐ地点のすぐ右岸に広がる地域である。近年、島根医科大学の開学に伴う都市区画整理事業で宅地化が進み、市内で最も人口増加率の高い地区である。上塩治地区が丘陵下の旧自然堤防となだらかな丘陵が広がるのにくらべ、西方は沖積低地と神戸川の旧自然堤防帶が伸びている。

神戸川の旧自然堤防上は、現在ほとんど宅地と畠地として土地利用がなされているが、遺跡が存在するところもこの旧自然堤防上である。

神戸川の旧自然堤防のうち、天神、塩治町付近は、南から神門寺付近遺跡、塩治小学校付近遺跡、弓原遺跡、高西遺跡、天神遺跡など、幅500m、長さ1,000mにわたる旧自然堤防帶のほとんどの地域が遺跡となっており、それぞれを区分するのが難しい位連続して遺



図1 塩治地区とその周辺の主要遺跡

1. 大念寺古墳
2. 塚山古墳
3. 西谷墳墓群
4. 長者原廬寺
5. 菩提古墓
6. 上塩治築山古墳
7. 地藏山古墳
8. 半分古墳
9. 高西遺跡
10. 天神遺跡
11. 大桙古墳
12. 古志遺跡
13. 妙蓮寺古墳
14. 宝塚古墳
15. 知井宮多聞院遺跡
16. 小坂古墳
17. 茅山遺跡

跡が密集している。

上塩治地区においても、宮松遺跡から築山遺跡にかけての旧自然堤防帶は、広い範囲に遺物が散布している。また、丘陵下には、国指定史跡の築山古墳、地蔵山古墳をはじめ、半分古墳などが点在しており、市内でも最も埋蔵文化財の密集する地域を形成している。

塩治地区での遺跡の初現は、昭和54年に島根県教育委員会による発掘調査で発見された上塩治町の三反谷遺跡である。遺跡における同時期の規模は小さいが、市内における数少ない縄文時代の遺物散布地として、稀少価値がある。

弥生時代になると、矢野町の矢野遺跡や知井宮町の多聞院遺跡などの貝塚を伴う遺跡が営まれるが、塩治地区においても、弥生時代中期から急激に遺跡が増加していく。古墳時代においても、天神遺跡の他にも、高西遺跡、弓原遺跡、宮松遺跡、築山遺跡など、地区内の旧自然堤防の全域に遺跡が拡大しており、築山古墳に代表される華やかな後期古墳文化の担い手となっている。

奈良時代には、天神遺跡で掘立柱建物跡などが検出されているが、同遺跡の規模からしても、かなりの遺構が埋蔵されていることが予想され、一大中心地であったことはほぼ間違いないと思われる。また、かなりの集落が古墳時代以降ひき続き営まれており、出雲平野のなかでもかなりの生活適地であったことが窺われる。さらに、奈良時代には、神門寺境内廃寺、長者原廃寺などの私寺が建造されるほか、菅沢古墓などの初期火葬墓があり、いちはやく仏教文化の萌芽が認められるのも興味深い。

中世にはいると、鎌倉時代後半には、出雲守護職塩治氏の居館がおかれていた。出雲平野の中央に位置した交通、軍事上の要衝にあり、経済基盤の安定したこの地域が特に選ばれており、塩治判官高貞が横死するまでは、出雲国の政治的中心となっていた。

また、戦国時代には、一時期尼子経久の子、興久が塩治郷一帯を所領としていたこともある。

天神遺跡においては、1971年に海上地区土地区画整理事業に伴って発掘調査がなされて以来、4度の調査を経ている。弥生時代中期中葉から近世までの長期間、連続と集落が営まれていることが、これまでの発掘調査で明らかになっている。しかし、遺構、遺物の出土状態からみて、弥生時代の居住空間は、総じて遺跡の北東部に集中している傾向にあり奈良時代以降については、西部や南部に検出されている。各時期による生活の場が、複合している地点もあるにせよ、大局的にみると前述のように二極化しているのは、注視する必要がある。

塩冶地区遺跡分布調査天神遺跡周辺地形測量図

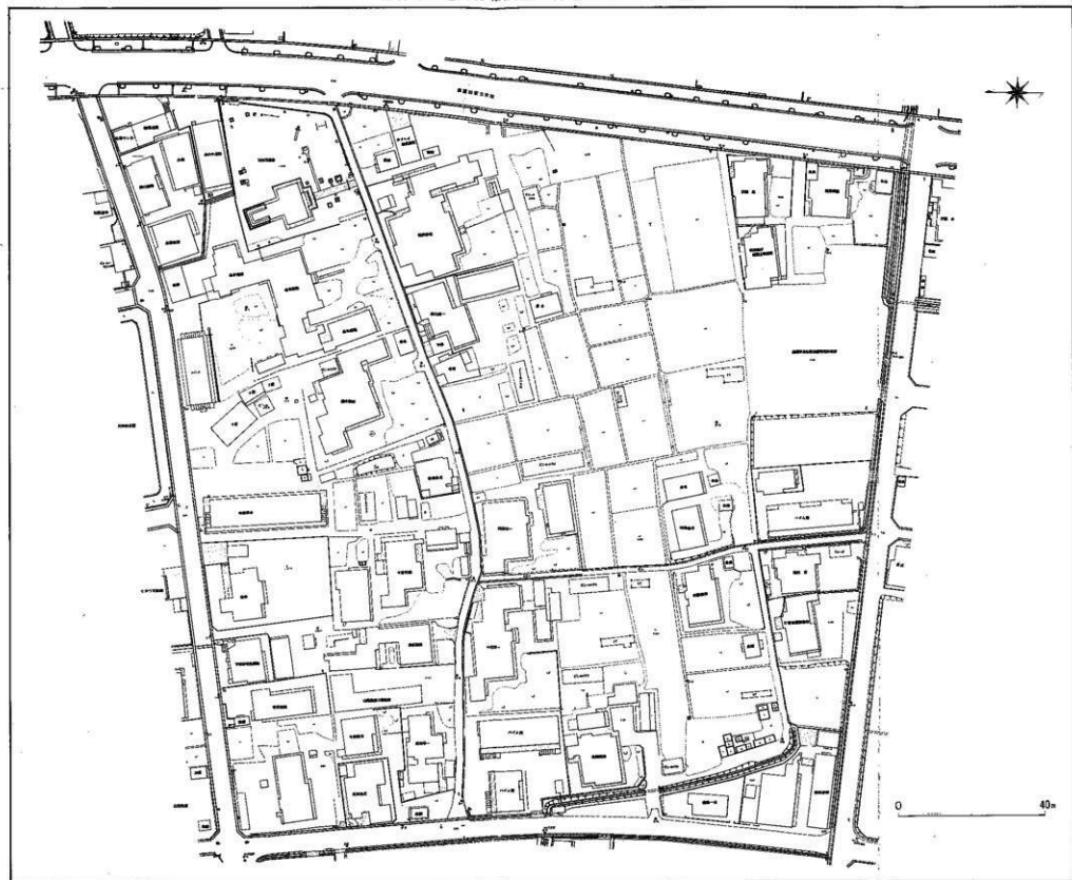


図2 天神遺跡周辺地形測量図

2. 調査の概要

塩治地区遺跡分布調査は、国庫補助事業として、昭和60年度と61年度の2カ年継続で行なった。今年度は、塩治地区のうち、上塩治町をのぞく地域を対象として実施した。

調査は、現地踏査による遺跡分布調査を行ない、地形図上に遺跡を表示する調査と、弥生時代以降の大複合遺跡として有名な天神遺跡の発掘調査である。

遺跡分布調査は、昭和62年1月に行なった。神戸川の旧自然堤防上が主な対象であるが、敵寒の下、島根大学学生の協力を得て実施した。

発掘調査は、医大通りが開通して以来、店舗の新築等、開発が急速に進み、遺跡が破壊の危機に直面している天神遺跡を対象として、昭和61年12月2日から12月27日にかけて実施した。調査の結果、これまで発掘調査が行なわれたことのなかった天満宮の南から南西にかけての畠地一帯に、良好な遺構が遺存されていることがわかった。また、これまでの調査で、弥生時代の遺構は天神遺跡の北東部に集中していたが、天満宮の南にも弥生時代の遺構が存在することが確認でき、さらに、これが広がる可能性もあることが判明した。

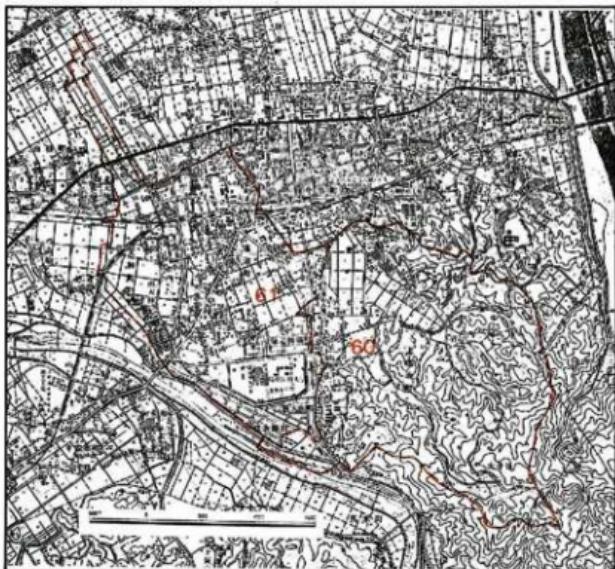


図3 遺跡分布調査対象区域（年度別）

3. 天神遺跡範囲確認発掘調査

第1トレンチ

遺構

本トレンチは、天神天満宮の南の畠地に設定した。当初 $2.5 \times 10\text{m}$ の規模のトレンチを設定したが、溝状遺構を精査するため東側へ $2 \times 5\text{ m}$ 拡張した。

トレンチでの層位は、耕作土（層厚20cm）の下に、二層の褐色土層（層厚30cm、層厚20cm）があり、その下は黄褐色シルト層又は砂層（地山）となっている。土層中にかなりの小砾が混じっているのが、他のトレンチと異なる点である。天神遺跡の中心部に近いため、かなりの遺構と遺物の検出が予想されたが、意外と少なかった。

検出した遺構は、溝状遺構4条、ピット13個である。

溝3は、上幅2.2m、下底幅0.6m、深さ0.8mのかなり大きな素掘りの溝状遺構である。トレンチで確認した限りでは、東西方向に伸びる溝である。溝内からは、須恵器、土師器土師質土器の破片が出土している。溝2と溝4は、溝3をはさんだ北側と南側に、同じ形態で位置している幅0.6m、深さ0.5mの溝状遺構であり、溝3と何らかの関連があると推



写真1 天神遺跡発掘調査（第1トレンチ）

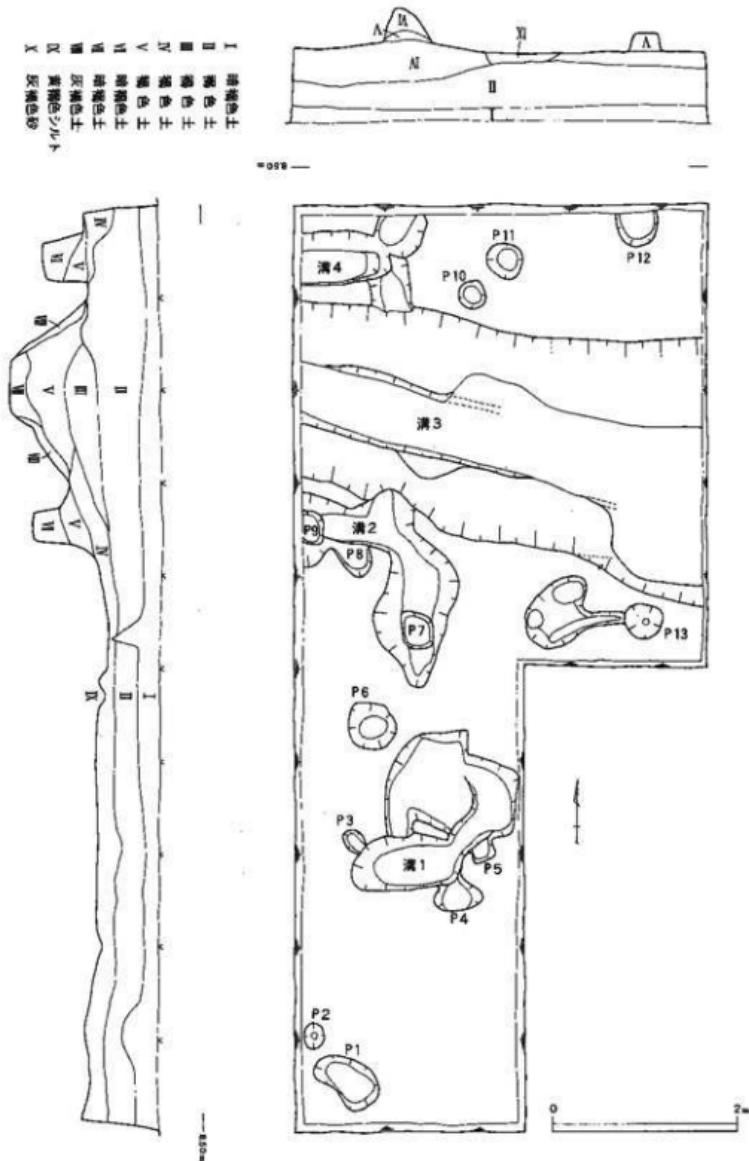


図4 第1トレンチ実測図



写真2 第1トレンチ（北から）



写真3 第1トレンチ溝状遺構（東から）

定されるが、性格は不明である。ピットでは、遺構となるようなものは存在しない。

遺物

トレンチの規模からすると、遺物は必ずしも多くない。遺物が最も多かったのが、溝3で、須恵器と土師質土器が比較的多かった。溝の下底付近からは、土師質土器小皿（図5-1）と須恵器蓋（図5-11）が出土しているが、このうち蓋は、溝3の東側の下底が南へ広がったところから出土しており、溝3によって切られた別の遺構（土壤等）に関連する遺物である可能性が強い。溝3の時期は、遺物からみて、中世の溝と推定できる。溝3内からは、他に擬宝珠状のつまみをもつ蓋（図5-2）や、色調、胎土からみて別個体ではあるが同時期と思われる須恵器坏身（図5-3）と坏蓋（図5-6）も出土している。また、須恵器壺（図5-7）や赤色塗彩の土師器坏（図5-9）が上層から出土している。図示はしていないが、甕片もあった。

溝3以外では、遺物は少なかった。溝1付近から、磨研した平坦面をもつ石製品（図5-8）が出土したが、用途は不明である。また、遺構に伴わない遺物として、中世の須恵質の片口（図5-5）や、土師器壺又は甕の底部（図5-10）がある。

また、1片だけではあるが、弥生土器も出土している。トレンチの南端近くから出土し

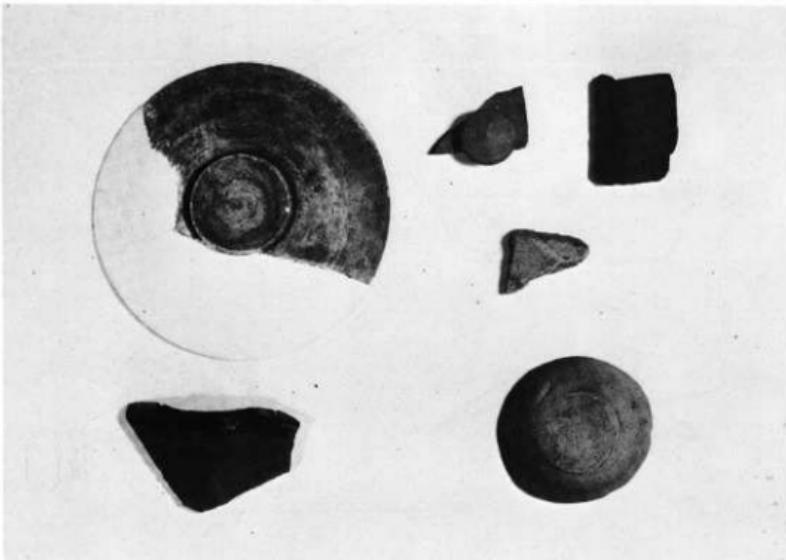


写真4 第1トレンチ出土遺物

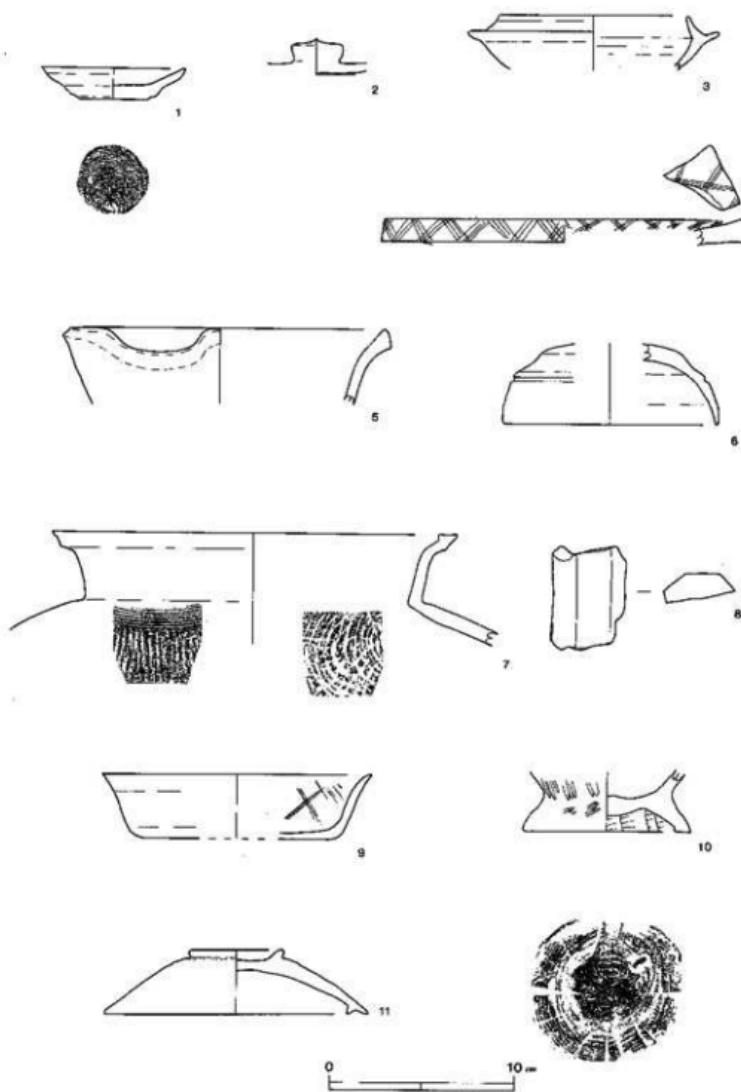


図5 第1トレンチ出土遺物実測図

た弥生時代中期の壺の口縁部破片（図5-4）であるが、口縁端部に3～4条で構成される山形文を配し、口唇部に同じ手法で斜格子文を描いている。

第2トレンチ

遺構

本トレンチは、第1トレンチの南の神戸川旧自然堤防の縁辺部に設定した。昭和53年に出雲考古学研究会によって発掘調査がなされ、縁軸陶器が出土した畑地や、その西隣の墨書き土器が出土した畑地のすぐ西に位置しており、奈良～平安時代の遺構が期待できるトレンチである。

トレンチでの層位は、耕作土（層厚20cm）の下に褐色土層（層厚30cm）があり、遺物包含層となっている。さらにその下は、黄褐色シルト層又は砂層（地山）である。

遺構としては、溝状遺構4条のほか、ピット2個、土壤、落ち込み状遺構である。

当初、 4×4 mの方形トレンチを設定したが、南側と北側に褐色土の落ち込みが検出されたため、北へ 2×4.5 m、南へ 4×1.5 mのトレンチを拡張した。

溝1は、北拡張トレンチに検出された遺構である。上幅3.0m、下底幅1.0m、深さ1.2mの素掘りの大溝で、トレンチで知る限りでは、北西～南東の方向に伸びている。下底はほ



写真5 第2トレンチ付近景（南から）

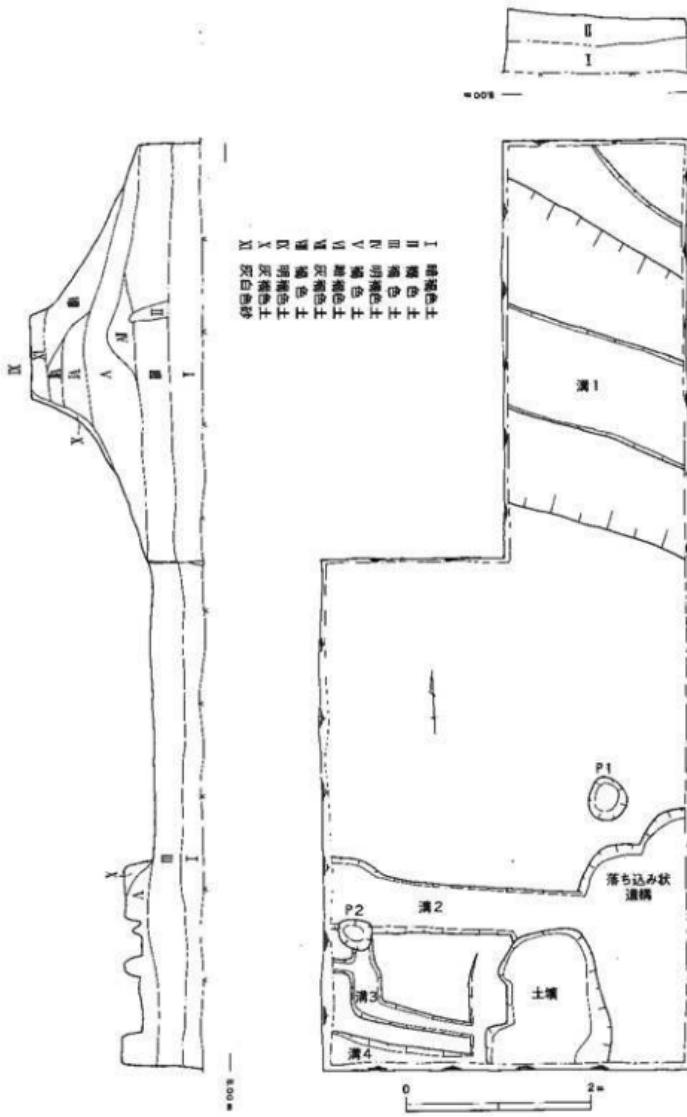


図6 第2トレンチ実測図



写真6 第2トレンチ溝状遺構発掘状況



写真7 第2トレンチ溝状遺構（東から）

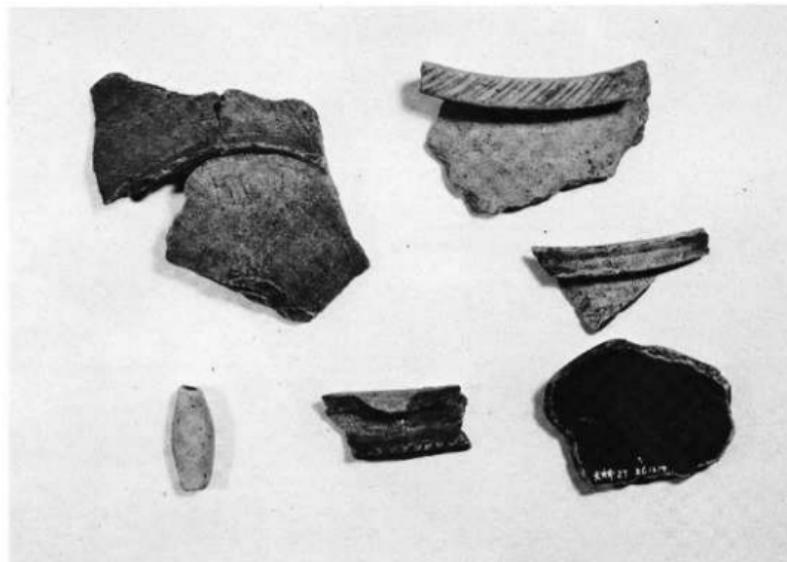


写真8 第2トレンチ出土遺物

は平坦で、0.4m程度急な角度で立ち上ったのち、両側に緩く広がっている。溝内からは、弥生時代中期の土器片がかなり出土し、当該期の遺構と推定される。同地付近では、弥生土器が殆んど確認されておらず、弥生集落を囲繞する環溝である可能性もあるが、昭和53年に出雲考古学研究会が発掘調査をした畑地にこの大溝が確認されていないことを考えあわせると、性格を異にするものかも知れない。また、土壤は、やや浅い短径1.0m、長径1.5m以上の不整形を呈しているが、境内からは弥生土器が出土しており、溝1とともに、天溝宮の南辺ではあまり知られていなかった弥生時代の遺構である。

このほかにも、性格の不明な溝状遺構3条のほか、落ち込み状遺構がある。

遺物

他のトレンチと異なり、弥生時代の遺物が多かった。溝1からは、下底付近から短頸の弥生土器甕（図7-12）が出土したほか、高环（図7-13・14・15）などが認められている。また、その上層からは、放射状暗文のある土師器坏（図7-16）や甕片、管状土錘（図7-20）などが出土している。

南側にある土壤内からは、弥生土器甕（図7-17・18）のほか、壺（図7-19）が出土し、付近からは、甕の基部（図7-21）や土師質土器坏（図7-22）などが認められた。

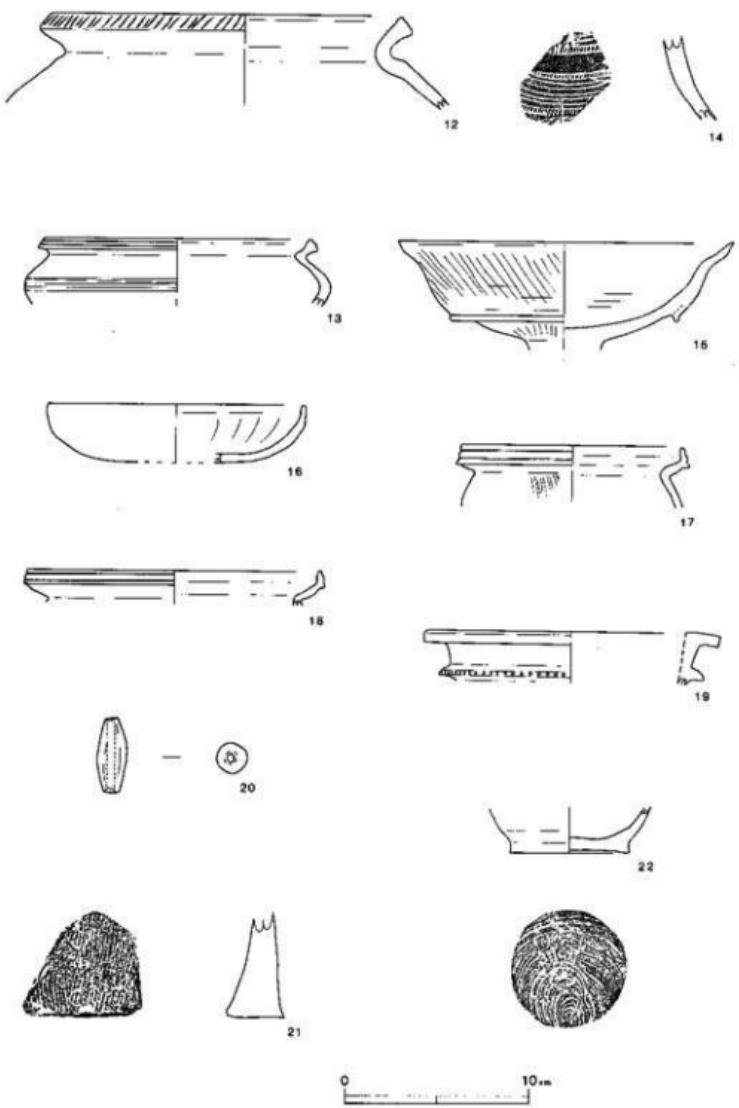


図7 第2トレンチ出土遺物実測図

第3トレンチ

遺構

本トレンチは、第4・5トレンチとともに、從来、発掘調査はもちろんのこと、表様もあまりなされていなかった神戸川旧自然堤防の南西縁辺部に位置している。天神遺跡の中心部からは大きくはずれているので、遺構が少ないと予想されていた地点である。

トレンチでの層位は、耕作土（層厚40cm）の下に褐色土層（層厚20cm）があり、遺物包含層となっている。さらに、その下には、黄褐色シルト層又は砂層になっており、遺構として最も深いP10の下底（表土からの深さ1.8m）からは湧水がある。

当初、トレンチは、 $2 \times 8\text{ m}$ を設定したが、遺構の確認のため、トレンチ南側の南と西にそれぞれ $1 \times 2\text{ m}$ 拡張した。

遺構としては、予想した以上のかなり残存状態の良好な遺構が、トレンチ全面にわたって検出できた。かなり複合化しているが、溝が4条、ピット10個、落ち込み状遺構4個である。

溝は、溝2が東西方向である以外は、溝1・3・4とも北西—南東の方向に伸びている。溝1と溝3は、同方向であるうえ、幅0.3m、深さ0.2mと同規模で、遺物が殆んどないた



写真9 第3トレンチ（南から）

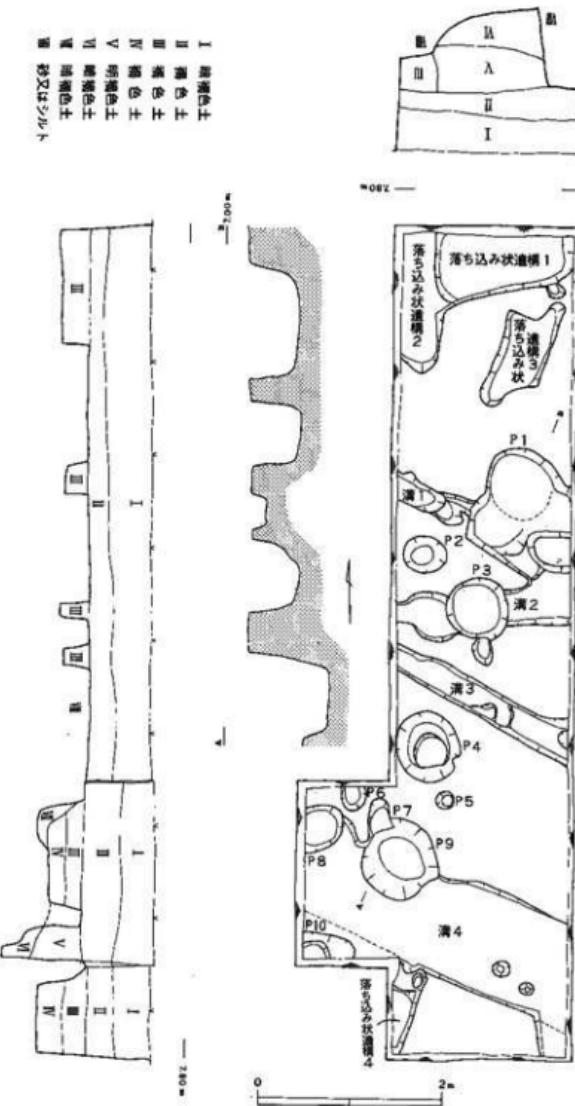


図8 第3トレンチ実測図



写真10 柱穴列（東から）

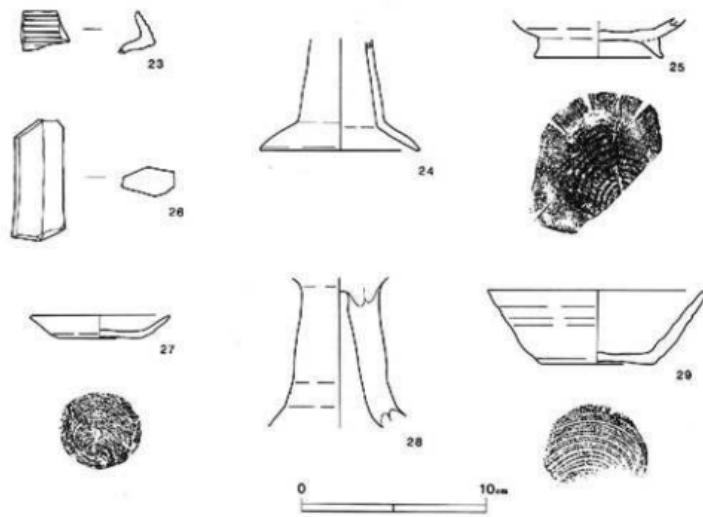


図9 第3トレンチ出土遺物実測図



写真11 第3トレンチ出土遺物

め時期は不明だが、同時期の遺構と推定される。また、溝4では、土師質土器が多く出土し、P8、P9を切っていることからみて、中世の溝状遺構であろう。溝1・3についてもその方向からみて溝4と同時期である可能性も強い。溝2は、P3を切っており、溝内から濃緑色の釉のかかった須恵土器片や、須恵器片が出土しており、溝1・3・4よりもやや遅い時期の遺構と推定される。

-ピットでは、P1、P3、P4が、径0.7m、深さ0.6mの同規模で、一列に並んでおりかなりの建物跡が推定できる。しかし、遺物の多くは細片のため時期は不明だが、かつて発掘調査で検出された奈良時代の掘立柱建物跡とは少し方向が異なっているため、同時期の可能性は少ない。そのほかでは、P9とP10から、少量だが、弥生土器片が確認されている。

遺物

遺物としては、弥生土器片が少量あるほかは、土師器、須恵器、土師質土器が殆んどを占める。弥生土器（図9-23）は、トレンチ中で最も深いP10の下底から出土している。壺か甕の口縁部破片で、5条の凹線をもつ。土師器高坏（図9-24）は、脚部のみを残すが、P10の上部から出土したものである。土師質土器小皿（図9-27）は、溝4から出土

したものである。他の図示した土器類は、いずれも、第2層から、遺構には直接伴わないで出土した遺物である。土師質土器壺（図9-25-29）のような遺物は、このトレンチでは比較的多かった。土師器高壺（図9-28）は、外面のみ赤色塗彩している。須恵質の平瓶（図9-26）は、把手の一部で、片方に自然釉がでている。

第4トレンチ

遺構

本トレンチは、神戸川旧自然堤防の最西端に位置し、第1～5トレンチのなかでも最も西にある。かつて、寺があったといわれており、遺構の存在はあまり期待できないと予想されていた。

トレンチは、南北方向に $1.5 \times 8\text{ m}$ の大きさに設定した。

トレンチでの層位は、耕作土（層厚30cm）の下に2層の褐色土（層厚20cm、層厚30cm）があり、遺物包含層となっている。さらにその下は、砂層（地山）になっており、このトレンチでは、黄褐色シルト層は殆んど認められなかった。表土から地山面までは0.8mで、やや深い。

遺構としては、溝4条のほか、ピット4個落ち込み状遺構がある。溝幅は異なっているものの、いずれも深さは0.2m以内の浅いもので、性格は不明である。ピットは4個検出されているが、遺構として結ばれる可能性のあるものはない。落ち込み状遺構は、かなり大

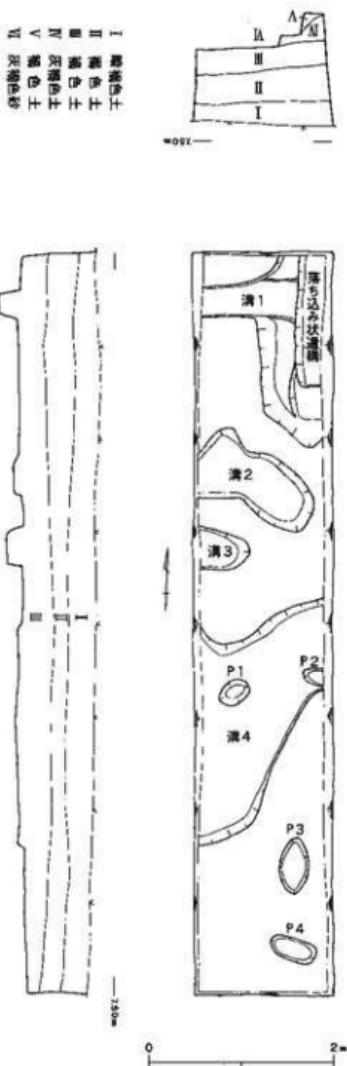


図10 第4トレンチ実測図



写真12 第4トレンチ近景（南から）



写真13 第4トレンチ（南から）

きな土壌状の遺構であろうが、性格は不明である。

遺物

概して、遺物の量は、第1～5トレントの中では最も少なかった。それらは、いずれも土器の小破片であり、時期を特定できるものは殆んどなかった。溝のうち、溝3からは、須恵器の高台付き壺の底部が出土しており、奈良時代の遺構と推定される。溝4は、須恵器の破片2片が認められたのみであるが、中世以前の遺構と思われる。ピットからの遺物は殆んどなかったが、P4から土師器片と須恵器片が出土しており、中世以前の遺構である。このトレントは、中世以後の遺物は殆んどないのが特色である。

第5トレント

遺構

本トレントは、第3トレントの10m東に設定したトレントである。休耕地が狭かったので、第1～5トレントの中では、最も小さい2×5mのトレントを設定した。この一角は、これまで調査がなされていない地域のため、天神遺跡における位置づけを知るために第3～5トレントを密に配置したものである。

トレントでの層位は、耕作土（層厚60cm）の下に褐色土層（層厚20cm）がある。さらにその下は、黄褐色シルト層（地山）又は砂層となっている。

遺構としては、溝3条のほか、ピット3個と落ち込み状遺構が検出できた。トレントの規模のわりには、遺構が複合しており、第3トレントを考えあわせると、この辺りにかなり大きな遺構が埋蔵されている可能性が高い。

溝は、東西方向の溝を切って、溝2

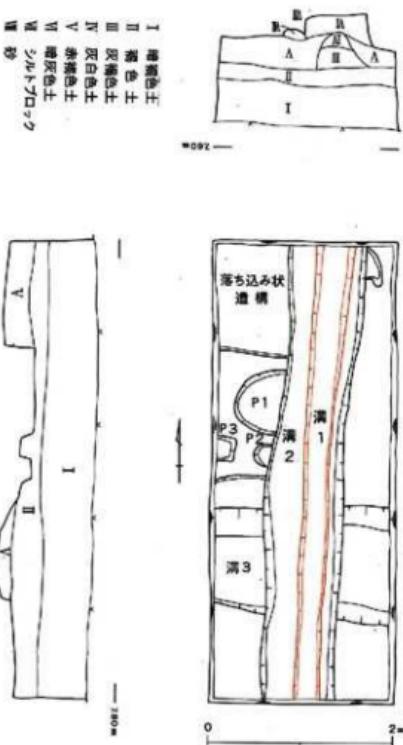


図11 第5トレント実測図



写真14 第5トレンチ溝1（南から）



写真15 第5トレンチ（南から）

と溝1が掘られており、さらに、溝1は溝2を切って同方向に伸びている。切り合ひ関係からみると、古い方から溝3→溝2→溝1の順になる。溝3は、溝幅は1.0mあるが、皿状の浅い溝である。溝2は、溝幅0.7m深さ0.3mの溝である。溝1は、溝幅0.3m、深さ0.4mの小溝であるが、灰褐色のかなりの粘質土が溝内にあり、当時は滞水していたことが知られるが、その性格は、部分的な検出のため、不明である。この溝からは、出土遺物がかなり多く、密度としては、本遺跡で最も高い。

ピットは、溝の西側に3個検出された。P1は、かなりしっかりしたピットで、径0.7m、深さ0.3mの大きさであるが、他の2個は小ピットである。溝2に切られしており、これより古い時期のものである。

落ち込み状遺構は、多くがトレンチ外にあるため、性格は不明であるが、溝1より古く溝2よりも新しい時期のものである。

遺物

遺物としては、中世～近世の陶磁器が多くを占めている。その殆んどは、溝1から出土している。溝1からは、伊万里の染付碗（図12-33）や唐津（図12-36）、煙管（図12-34・35）、青磁片など、近世を中心に出土している。また、溝2からは、須恵器の高台付壺などが認められるので、溝3とともに、中世以前の造構である。遺構に伴わない遺物としては須恵器壺（図12-30・31）や把手（図12-32）などがある。

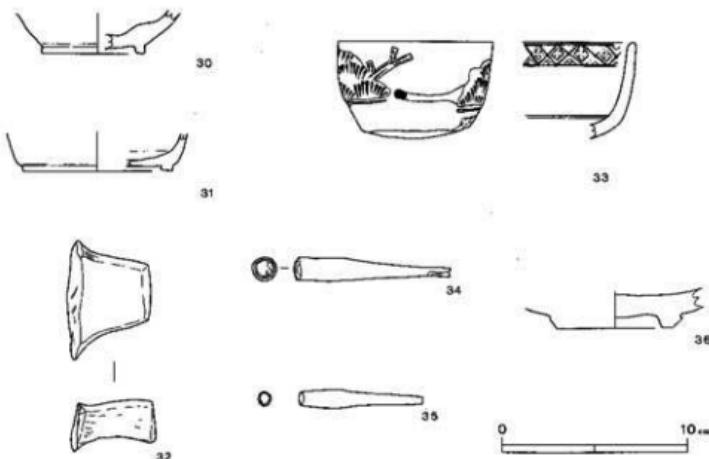


図12 第5トレンチ出土遺物実測図

4. 遺跡分布調査

塩治地区遺跡一覧表（上塩治町を除く）

番号	種別	名称	備考
1	散布地	荒神遺跡	白枝町にまたがる散布地で、荒神付近を中心とする水田に広がっている。 弥生土器、土師器がかなり磨耗した状態で確認されている。
2	集落跡	天神遺跡	矢野遺跡とともに出雲平野を代表する弥生遺跡である。 弥生時代からの大複合遺跡で、奈良時代の神門郡家との説もある。
3	散布地	高西遺跡	天神遺跡の東につづく弥生時代以降の遺跡であるが、規模の大きさのわりには、実態は不明な点が多い。
4	散布地	弓原遺跡	高西遺跡の南に伸びる自然堤防上の遺跡である。 遺物の散布は少ないが、かなりの広範囲に広がっている。 発掘調査が行なわれていないため、遺跡の性格は不明である。
5	散布地	塩治小学校付近遺跡	弓原遺跡の南に広がっているが、ひとつの遺跡である可能性もある。 遺物からみて、弓原遺跡、高西遺跡とほぼ同時期に営まれている。
6	散布地	神門寺付近遺跡	神門寺付近での発掘調査によって、弥生時代以降の遺物が出土している。
7	古代寺院跡	神門寺境内廃寺	発掘調査によって、庫裏裏の礎石下に基壇の版染層が検出されたほか、多量の瓦類が出土した。

凡 例

1. 遺跡地図は、上塩治町を除く塩治地区を9区分している。
2. 遺跡地図①～⑨は、出雲市都市計画図(2,500分の1)を2分の1に縮小して使用している。
3. 図中の記号は、次による。

○ 遺跡・散布地

匁 古代寺院跡

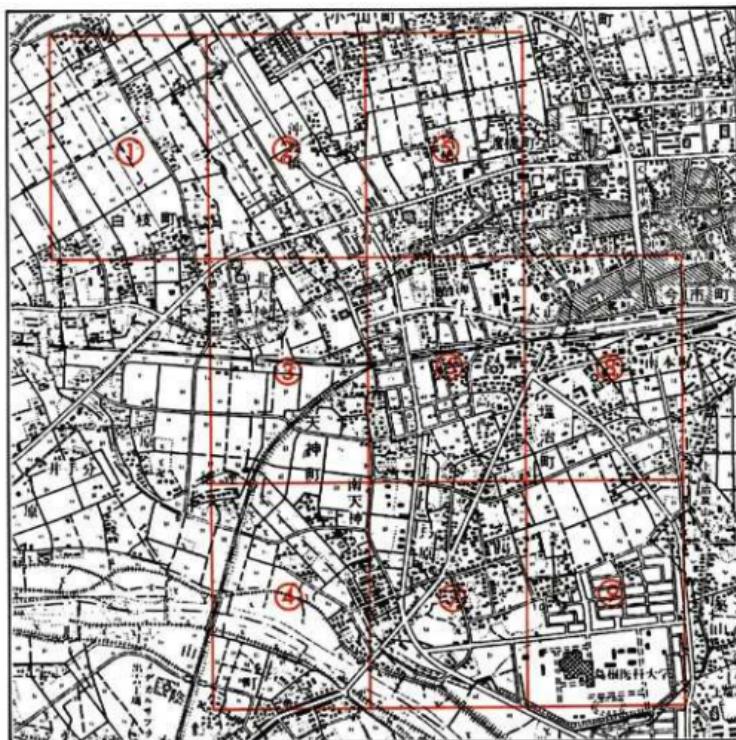


図13 遺跡地図区分図

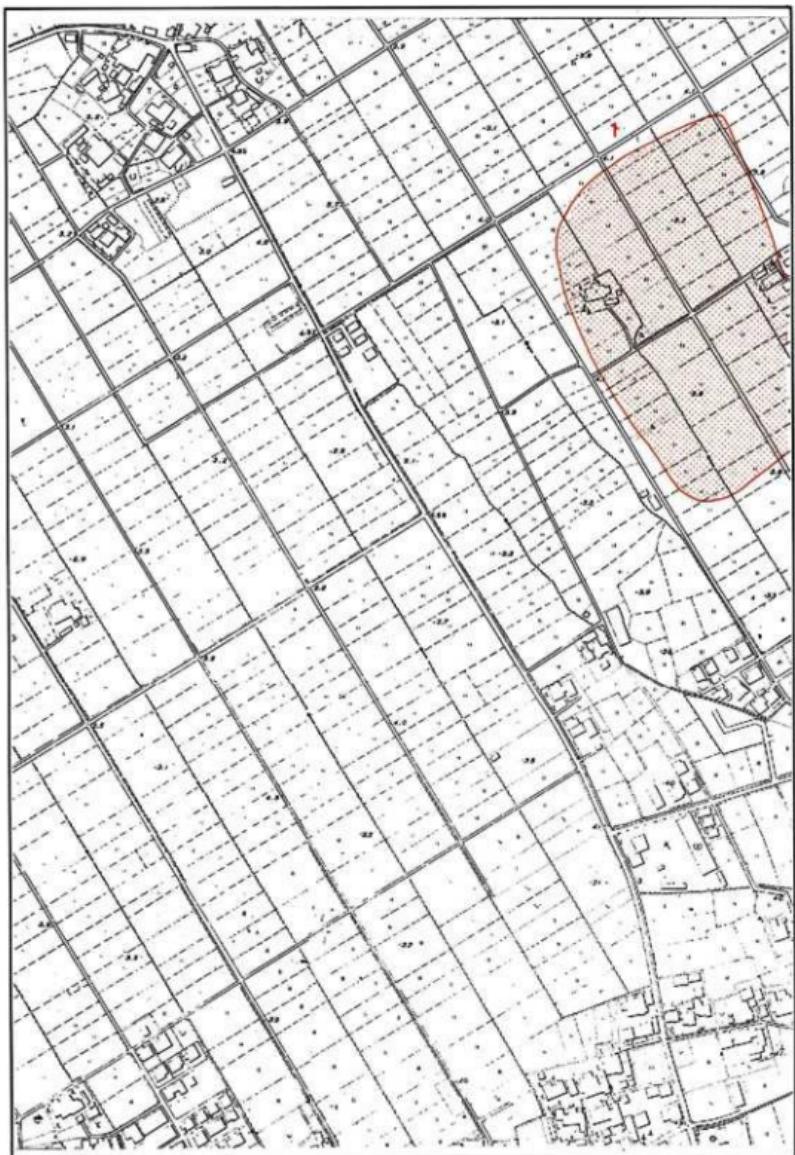


図14 遺跡地図①



図15 遺跡地図②



図16 遺跡地図③



図17 遺跡地図④

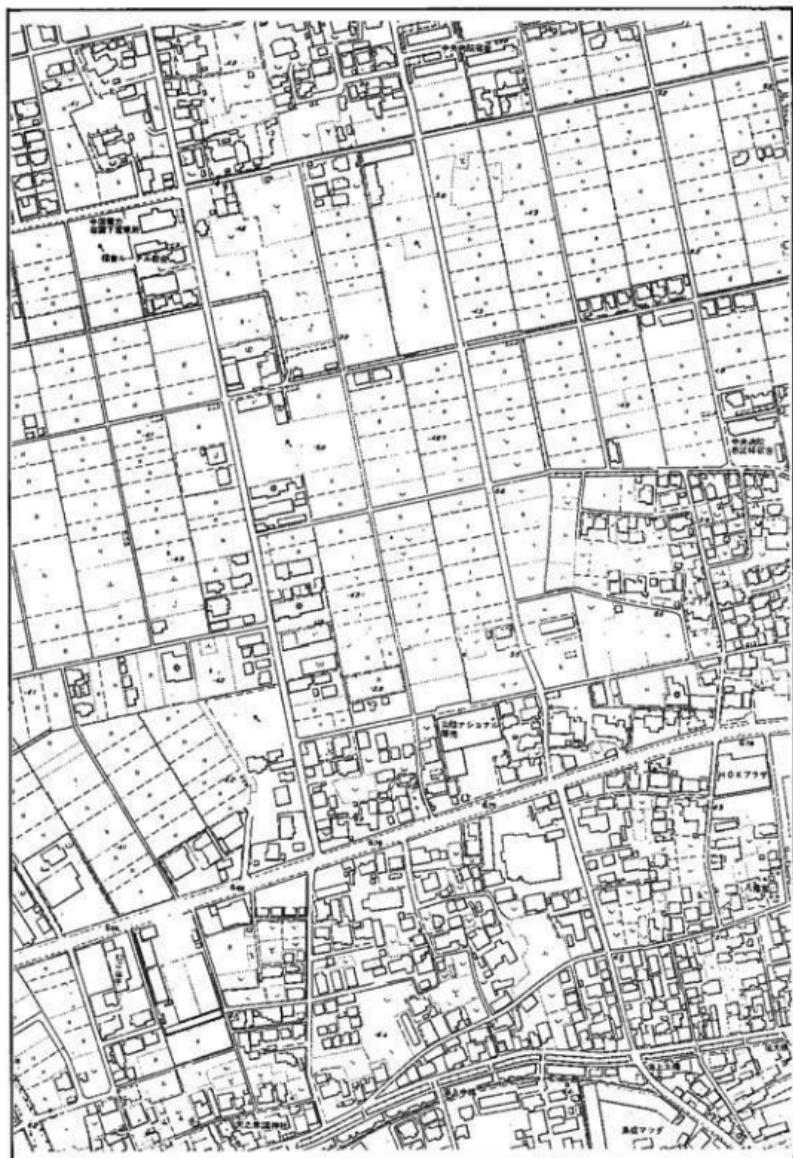


図18 遺跡地図⑤

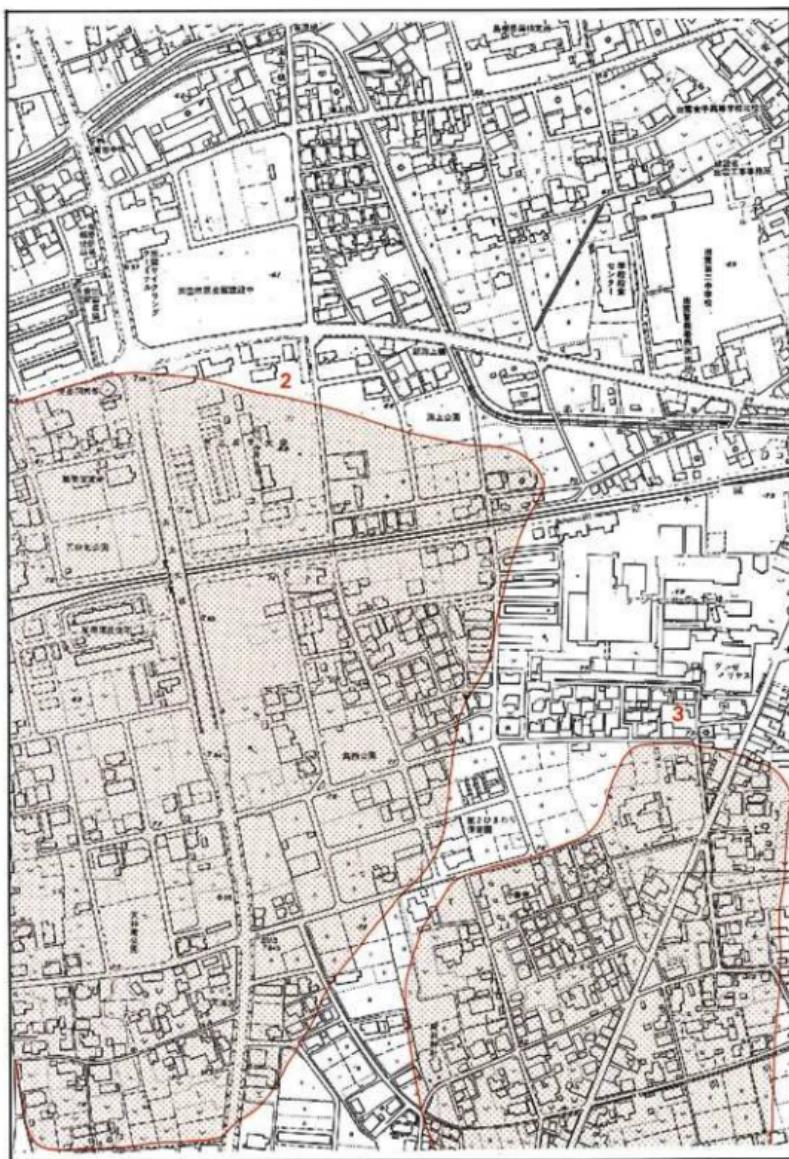


图19 道路地图⑥



図20 道路地図⑦



図21 道路地図⑧

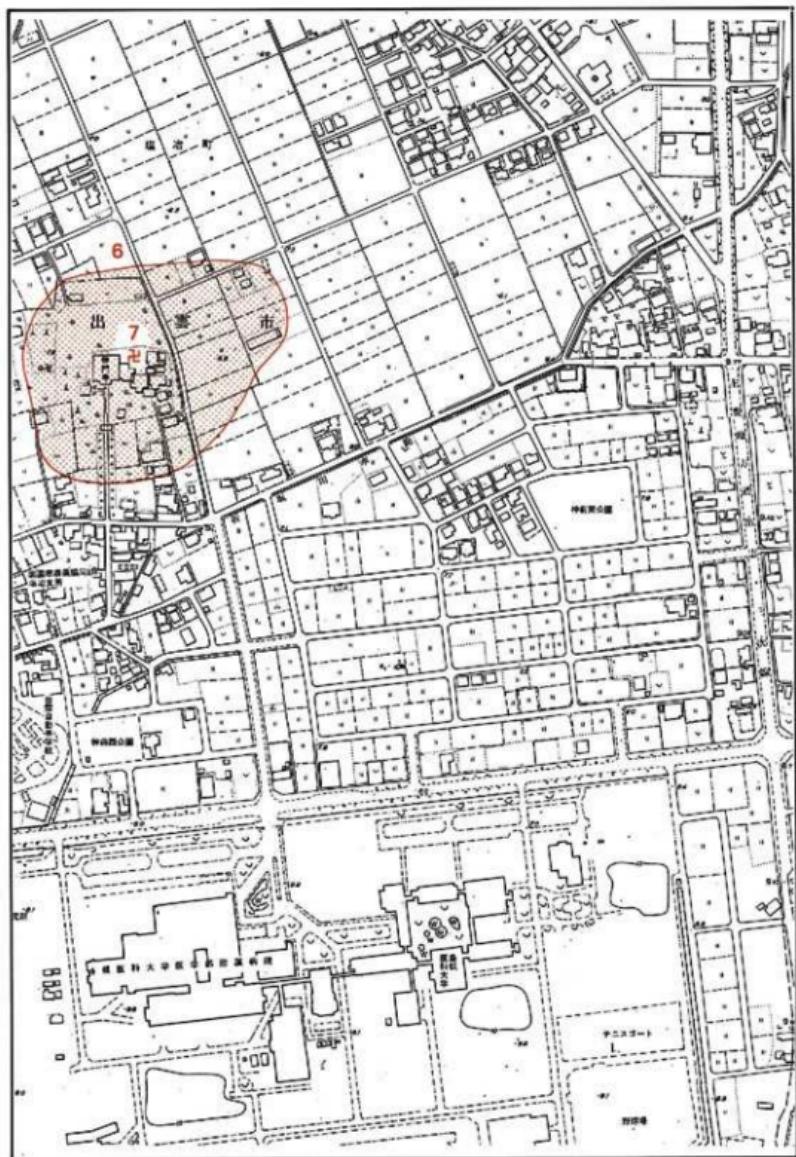
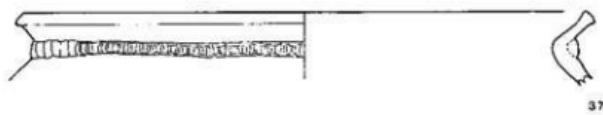


図22 遺跡地図⑨



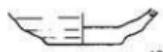
37



38



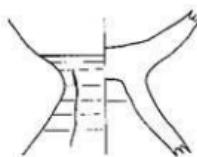
39



41



42



43



図23 分布調査表採遺物実測図

荒神遺跡 (37,38)、高西遺跡 (39,40)、弓原遺跡 (41,42)、塙治小学校付近道路 (43)

遺跡分布調査 出土遺物観察表

件名番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	器高					
5-1	環	7.8	3.6	1.7	体部内外面に回転ナデを施し、底部は、同軸糸切り後、未調整である。 ほぼ完品。	淡褐色	密	普通	
2	环(蓋)	-	-	-	平坦な大井部に複数珠状のつまみをもつ。 つまみ径2.8cm、高さ1.3cm。	青灰色	密	良	
3	环(身)	10.2	-	-	立ち上がりは内傾気味である。 受部深13.6cm。	青灰色	密	良	
4	壺	19.4	-	-	大きく外反する口縁部。底部は輪広の山形文で、口唇部は三条を一単位とする斜格子文を施す。	淡褐色	密	良	
5	片口	16.2	-	-	口縁部に幅5cmの片口をもつ。	青灰色	密	良	
6	环(蓋)	11.6	-	-	口縁部は内傾気味に広がり端部にいたる。 口縁部から2.5cmの位置に棱がある。 入井部は回転ヘラ削りで他は回転ナデ。	淡灰色	密	良	
7	壺	21.8	-	-	やや外反して立ち上る口縁部の端部が小さく崩曲する。 腹部下は櫛状工具によるカキ目で、その下は叩目。 内面は底部以下に青滑底。	暗灰色	密	良	
8	石製品	-	-	-	外面を磨研しているが、半欠品である。	暗灰色	-	-	用途不明
9	壺	14.6	10.4	3.5	やや外反気味で口縁部に立ち上がる。 体部内外面に回転ナデ。 内外面とも赤色彫彩。	淡褐色	密	良	
10	(底部)	-	9.0	-	高台接合部外面にタテ方向のヘラ削り。 高台内面に櫛状工具によるヨコ方向の施文。	暗褐色	普通	普通	
11	环(蓋)	14.2	5.0	3.5	体部内外面とも回転ナデ。 大井部外面はほぼ平坦で、径3cmの環状のつまみがつく。	淡青灰色	密	良	
7-12	壺	20.8	-	-	内外面ともナデ。口縁端部にヘラ状工具による剥目を施す。	淡褐色	著	良	
13	高环(?)	14.4	-	-	胴部にヘラ状工具による5条の沈線を施す。 口縁部は鋭く、端部に2条の凹線をもつ。	淡褐色	普通	普通	
14	高 壺	-	-	-	胴部に9条のヘラ状工具による平行沈線をもち、丸上部と最下部の沈線の間を逆続割穴による割目を施す。	淡褐色	密	良	
15	高 环	18.2	-	-	环部外面に明瞭な段をもうけ、斜行のハケメを施す。	淡褐色	密	良	
16	环	14.0	-	-	底部から内傾して立ち上がる。内外面はナデ。 内面に放射状の施文がある。内外面とも赤色彫彩。	赤褐色	密	良	

排列番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	高さ					
17	盞	12.0	—	—	短く屈曲した口縁部をもつ。底部に2条の凹線がある。 肩部内外面にはタテ方向のハケメ。	淡褐色	密	良	
18	盞	15.8	—	—	短く屈曲した口縁部をもつ。底部に2条の凹線がある。内外面ともハケメ。	淡褐色	密	良	
19	盞	16.0	—	—	口縁部が短く大きく聞く。底部は、施文なし。2cm下に突帯があり、頂部に割目を施している。	明褐色	密	良	
20	土鉢	—	—	—	口径0.5cm、最大径1.7cm、長さ4.2cmの、管状土鉢。	淡褐色	密	良	
21	甌	—	—	—	基部の一部。外面は摺状工具によるカキメ。 内面はヘラ削り。	灰褐色	普通	普通	
22	坏	—	6.4	—	内外面とも回転ナデ。底部は回転糸切り後未調整である。	褐色	密	良	
9-23	(口縁部)	—	—	—	口縁端部に5条の凹線を施す。	淡褐色	密	良	
24	高坏	—	8.6	—	脚部の下方で屈曲し大きく聞く。 外表面ナデ。内面へラ削き。	暗褐色	密	良	
25	(底部)	—	6.8	—	底部は、回転糸切り後、高台を、貼り付ける。	淡褐色	密	良	
26	平瓶	—	—	—	中央に棱があり、両側面はヘラ削りを施している。 一部に指痕压痕がある。	暗灰色	密	良	
27	小皿	7.4	4.6	1.3	内部の内外面とも回転ヨコナデ。底部は回転糸切り後、未調整である。	淡褐色	密	良	
28	高坏	—	—	—	脚部の内外面ともナデ。下端近くで大きく聞く。 外面には赤色漆彩。	赤褐色	密	良	
29	坏	11.8	6.2	4.0	体部内外面とも回転ヨコナデ。 底部は、回転糸切り後、未調整であるが、やや内高である。	褐色	密	良	
12-30	坏	—	6.2	—	体部は回転ナデ。底部には高台がつく。	暗灰色	密	良	
31	坏	—	8.0	—	体部は回転ナデ。底部には高台がつく。	青灰色	密	良	
32	瓶	—	—	—	体部から外方向へのハケメを施す。	淡褐色	密	良	把手
33	瓶	9.0	—	—	体部外面と内面上部に凹筋を配置。	灰白色	密	良	伊万里染付
34	煙管	—	—	—	吸い口部。長さ8.2cm。	淡綠部	—	—	
35	煙管	—	—	—	吸い口部。長さ6.6cm。	灰綠部	—	—	
36	(底部)	—	6.4	—	厚い底部に高台がつく。内面のみ施釉。	淡褐色	密	良	唐津
23-37	盞	30.4	—	—	くの字形に短く屈曲する口縁をもち、頭部には指痕压痕のある突帯をもつ。	灰褐色	密	良	

押出番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	脚高					
38	甕	23.4	—	—	短く外反する口縁部。 脚部には2条の凹線を施す。	淡褐色	密	良	
39	高 环	—	9.9	—	脚部は、八の字状に低く開く。端部は垂直。 脚部には、沈線によるタテ方向の透しを2ヵ所に入れる。	淡灰色	密	良	
40	环	—	4.0	—	体部内外面に回転ナデを施す。 底部は回転糸切り後、未調整である。	淡褐色	密	良	
41	高 环	—	—	—	环部の上端と脚部の下端を欠く。 脚部は八の字状に緩く開き、沈線によるタテ方向の透しを2ヵ所に入れている。	暗灰色	密	良	
42	环	—	10.0	—	体部内外面に回転ナデを施している。 底部はヘラ磨き。内外面とも赤色塗彩。	赤褐色	密	良	
43	高 环	—	—	—	脚上部片。赤色塗彩痕あり。	淡褐色	密	良	

昭和62年3月20日 印刷

昭和62年3月25日 発行

塩冶地区遺跡分布調査II

発行 出雲市教育委員会

印刷 株式会社 武永印刷